



# マダイ (日本海西部・東シナ海系群) ①

マダイは北海道から九州にかけて広範囲に分布し、本系群はこのうち日本海西部から東シナ海の沿岸を中心に分布する群である。本海域では人工種苗放流が1970年代後半から実施されている。

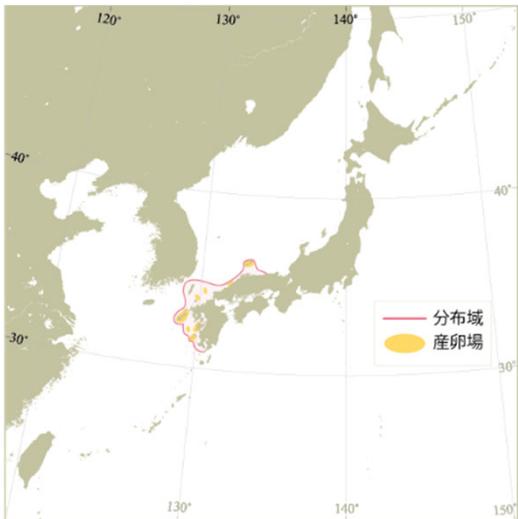


図1 分布域

日本海西部から東シナ海の沿岸を中心に分布し、1～3歳魚は春季の接岸と秋季の離岸を繰り返す。4歳以上の成魚は等深線に沿って、広域的に回遊すると推定されている。

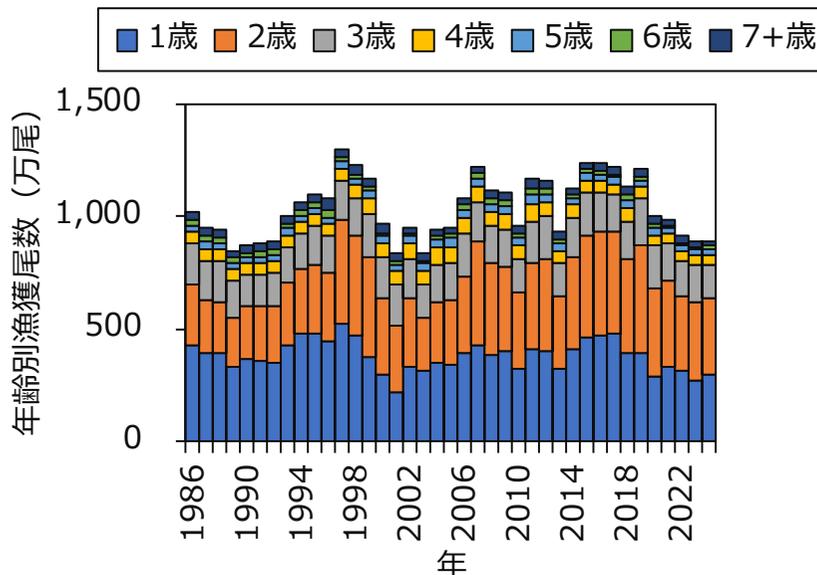


図3 年齢別漁獲尾数の推移

1986年から現在に至るまでの漁獲尾数は、小幅な増減を繰り返しながら、835万～1,300万尾の範囲で推移し、2024年は890万尾であった。年齢別に見ると1～3歳魚が漁獲物の多くを占め、2024年は1歳魚34%、2歳魚38%、3歳魚17%であった。

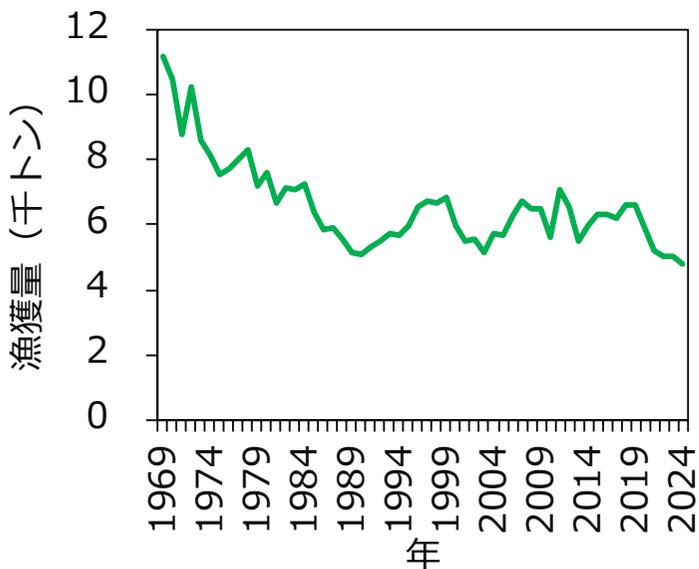


図2 漁獲量の推移

漁獲量は1969～1985年に減少した後、1986年以降は4.8千～7.1千トンの範囲で推移し、2024年の漁獲量は4,818トンであった。

# マダイ（日本海西部・東シナ海系群）②

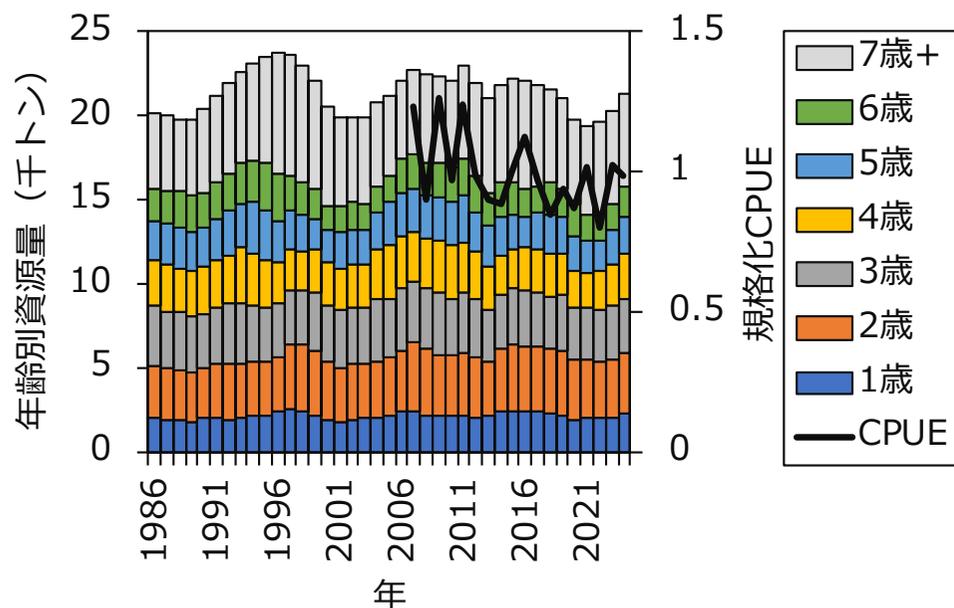


図4 年齢別資源量とCPUEの推移

1986年から現在に至るまでの資源量（1歳以上）は、小幅な増減を繰り返しながら、19.4千～23.8千トンの範囲で推移し、2024年は21.3千トンであった。2007年以降のCPUE（島根県大型定置網1日1経営体当たりの漁獲量を規格化したもの）は、短期間の増減を繰り返しているが、2018年までは全体として漸減傾向、以降は漸増傾向を示した。

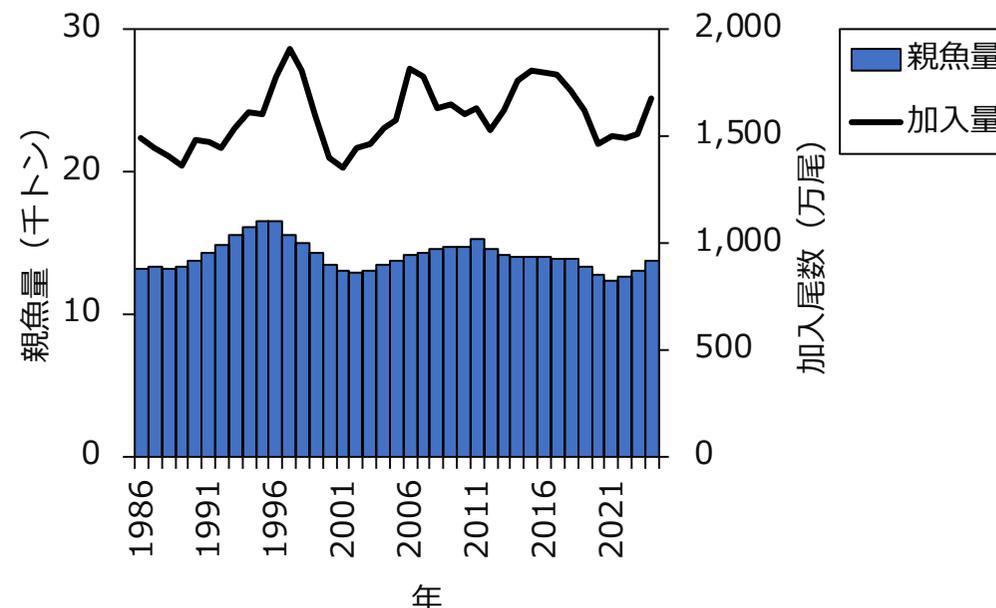


図5 親魚量と加入量の推移

1986年以降の親魚量は資源量と同様の増減傾向を示し、資源量の63～70%で推移し、2024年は65%（13.8千トン）であった。天然由来の加入量（1歳魚資源尾数）は、1,282万～1,825万尾の範囲で推移し、2024年は1,659万尾であった。

# マダイ (日本海西部・東シナ海系群) ③

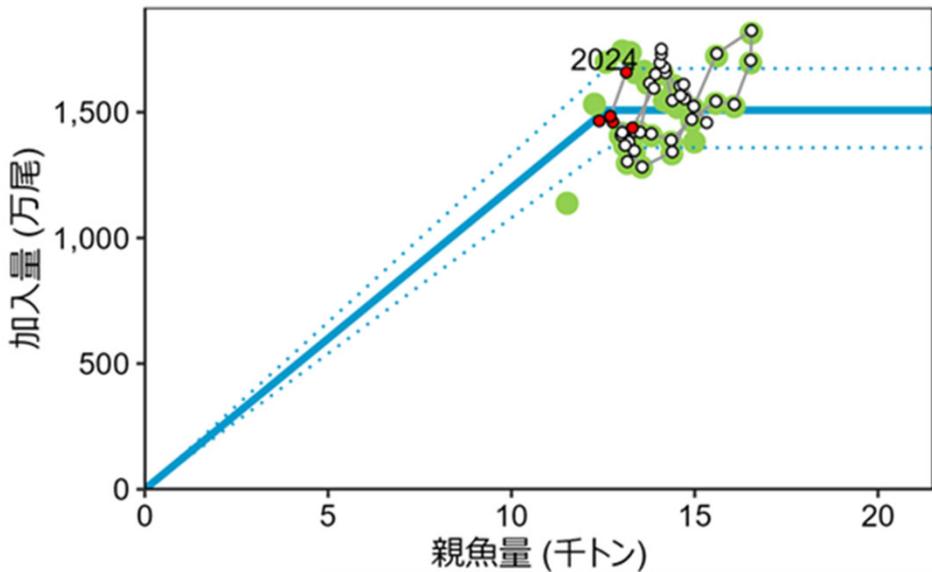


図6 再生産関係

1986～2018年の親魚量と1987～2019年の天然由来の加入量に対し、加入量の変動傾向を考慮したホッケ・スティック型再生産関係（青太線）を適用した。図中の青点線は、再生産関係の下で実際の親魚量と加入量の90%が含まれると推定される範囲である。

緑丸は再生産関係を推定した時の観測値、白丸は2025年度資源評価で更新された観測値、赤丸は直近5年間（2020～2024年）の観測値である。加入量はいずれも天然のみの値を用いた。図中の数字は加入年を示す。

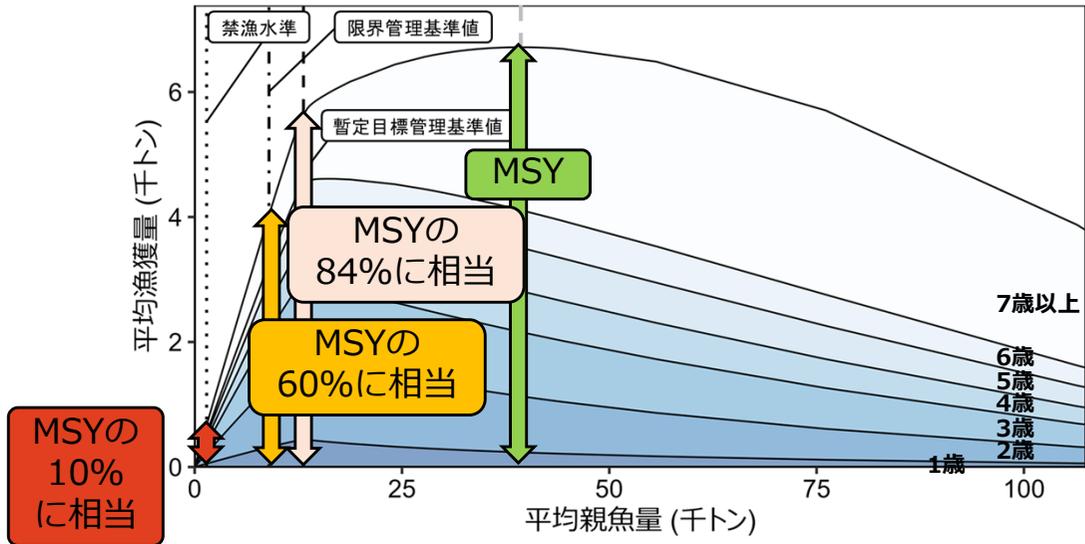


図7 管理基準値と禁漁水準

最大持続生産量（MSY）を実現する親魚量（SBmsy）は39.3千トンと算定される。暫定目標管理基準値は1～6歳魚のMSYを実現する親魚量（SB84%msy）、限界管理基準値はMSYの60%の漁獲量が得られる親魚量、禁漁水準はMSYの10%の漁獲量が得られる親魚量である。

SBmsy	暫定目標管理基準値 (SB84%msy)	限界管理基準値	禁漁水準	2024年の親魚量	MSY	84%MSY	2024年の漁獲量
39.3千トン	13.1千トン	9.0千トン	1.4千トン	13.8千トン	6.7千トン	5.6千トン	4,818トン

# マダイ（日本海西部・東シナ海系群）④

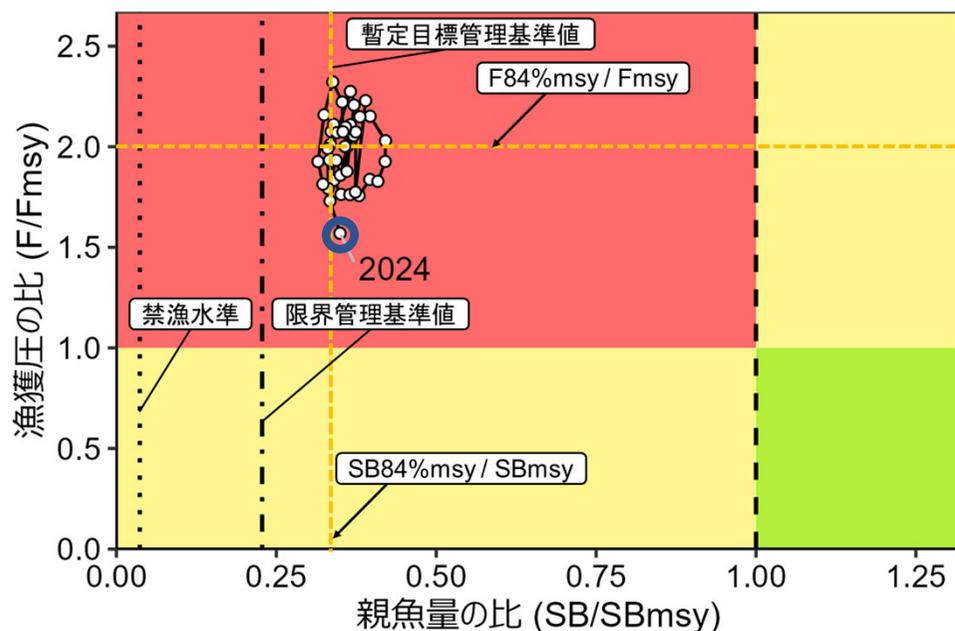


図8 神戸プロット (神戸チャート)

暫定目標管理基準値である1～6歳魚の最大持続生産量 (MSY) を実現する親魚量 (SB84%msy) のSBmsyに対する比と、SB84%msyを維持する漁獲圧 (F84%msy) のFmsyに対する比を橙破線で示す。1986年以降、親魚量 (SB) はSB84%msyの0.95～1.26倍の範囲で推移し、2024年は1.05倍であった。漁獲圧 (F) は、F84%msyの0.81～1.18倍で推移し、2024年は0.81倍であった。

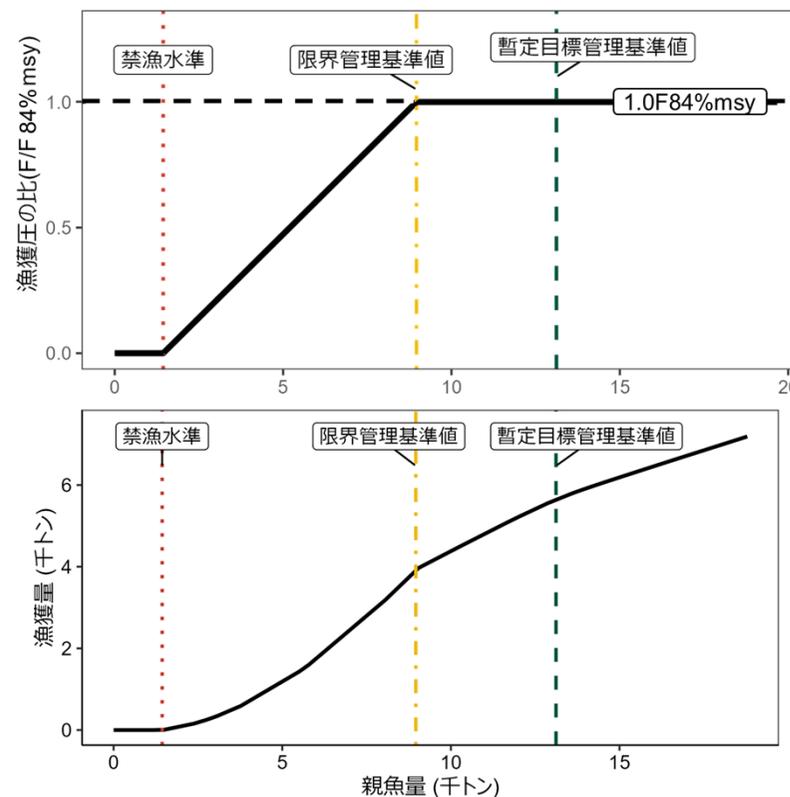
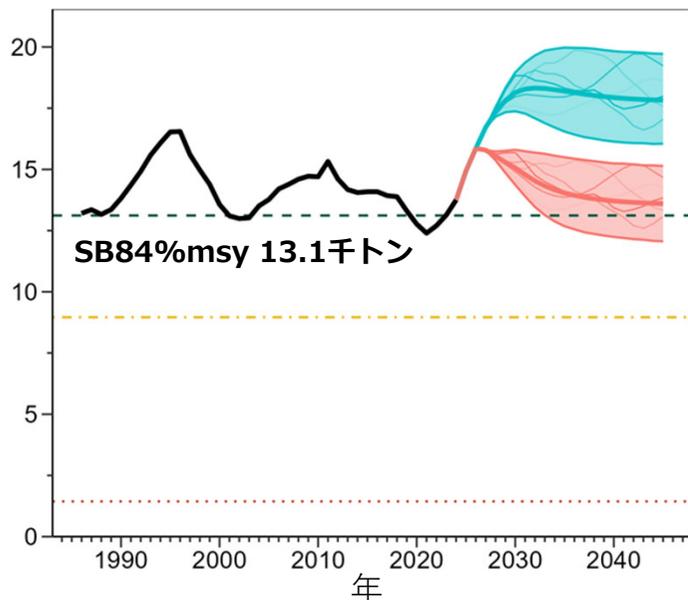


図9 漁獲管理規則 (上図：縦軸は漁獲圧、下図：縦軸は漁獲量)

F84%msyに乗じる調整係数である $\beta$ を1.0とした場合の漁獲管理規則を黒い太線で示す。下図の漁獲量については、平均的な年齢組成の場合の漁獲量を示した。

# マダイ（日本海西部・東シナ海系群）⑤

## 将来の親魚量（千トン）



## 将来の漁獲量（千トン）

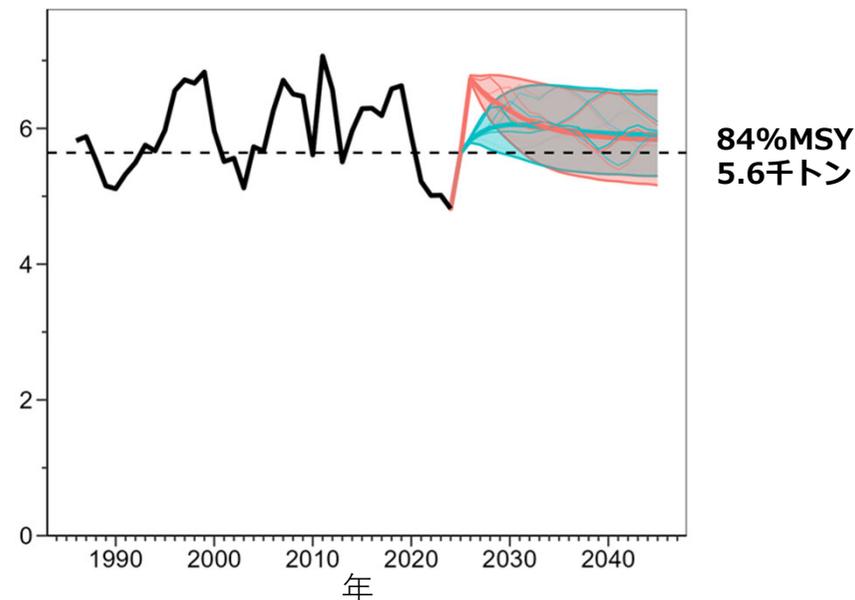


図10 漁獲シナリオの下での親魚量と漁獲量の将来予測（現状の漁獲圧は参考）

放流由来の加入を加算し、F84%msyに乗じる調整係数である $\beta$ を1.0とした場合の漁獲管理規則に基づく将来予測結果を示す。放流由来の加入尾数は2020～2024年の平均値（28.3万尾）とした。親魚量の平均値は暫定目標管理基準値に漸近した後、同値をやや上回る水準で横ばいとなる。また、漁獲量の平均値は当初、高い値を示した後、84%MSYよりやや高い水準で維持される。

■ 漁獲シナリオに基づく将来予測  
( $\beta=1.0$ の場合)

■ 現状の漁獲圧に基づく将来予測

実線は予測結果の平均値を、網掛けは予測結果（1万回のシミュレーションを試行）の90%が含まれる範囲を示す。

----- 84%MSY

----- 暫定目標管理基準値

-.-.-.- 限界管理基準値

..... 禁漁水準

# マダイ (日本海西部・東シナ海系群) ⑥

表1. 将来の平均親魚量 (千トン)

$\beta$	2035年に親魚量がSB84%msy (13.1千トン) を上回る確率											
	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	
1.0	15	16	16	16	15	15	15	15	14	14	14	86%
0.9			16	17	17	17	17	17	17	17	17	100%
0.8			17	18	19	20	20	21	21	21	21	100%
0.7			18	20	21	23	24	25	25	25	25	100%
現状の漁獲圧			17	17	18	18	18	18	18	18	18	18

表2. 将来の平均漁獲量 (トン)

$\beta$	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035
1.0	5,640	6,730	6,570	6,440	6,350	6,260	6,180	6,100	6,050	6,000	5,960
0.9		6,170	6,240	6,280	6,300	6,320	6,310	6,280	6,260	6,230	6,210
0.8		5,590	5,860	6,050	6,200	6,310	6,390	6,430	6,440	6,440	6,430
0.7		4,990	5,420	5,750	6,010	6,230	6,390	6,500	6,570	6,600	6,620
現状の漁獲圧		5,830	5,940	6,000	6,040	6,060	6,050	6,040	6,030	6,010	5,990

漁獲シナリオに基づき漁獲した場合の平均親魚量と平均漁獲量の将来予測を示す。漁獲シナリオでは、放流由来の加入を想定し、F84%msyに乗じる調整係数である $\beta$ を1.0とした場合の漁獲管理規則で漁獲を行う（赤枠）。放流由来の加入は2020～2024年の平均値（28.3万尾）とした。2025年の漁獲量は予測される資源量と現状の漁獲圧（2022～2024年の平均： $\beta=0.87$ 相当）により仮定した。この漁獲シナリオに従うと、2026年の平均漁獲量は6,730トン、2035年に親魚量が暫定目標管理基準値を上回る確率は86%と予測される。併せて $\beta$ を0.7～0.9の範囲で変更した場合と現状の漁獲圧の場合の予測結果も示した。

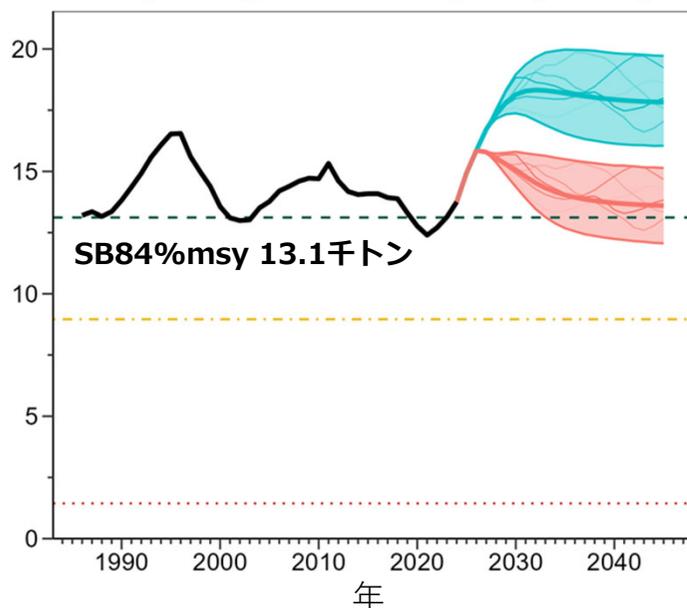
表3. ABC要約表

2026年のABC (トン)	2026年の親魚量予測平均値 (千トン)	現状の漁獲圧に対する比 (F/F2022-2024)	2026年の漁獲割合 (%)
6,730	15.9	1.14	28

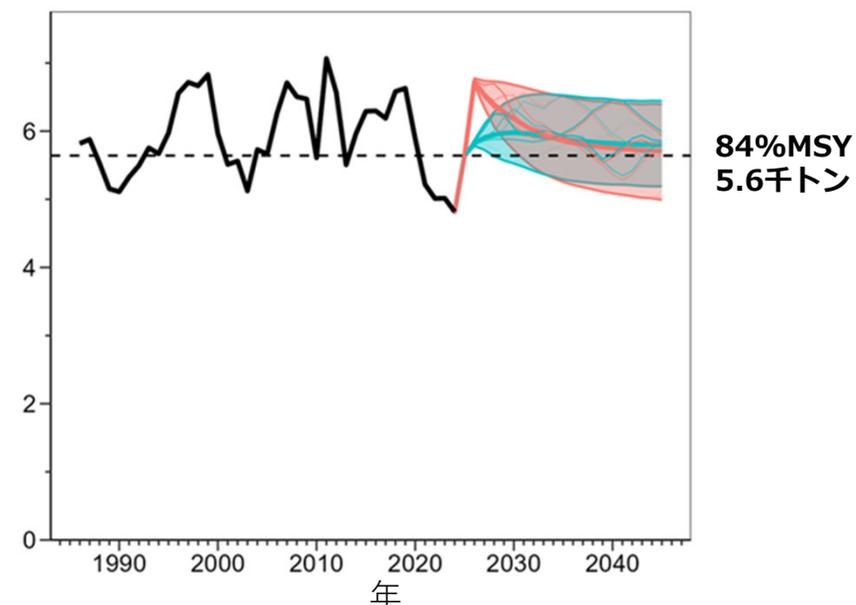
※ 表の値は今後の資源評価により更新される。

# マダイ（日本海西部・東シナ海系群）⑦

## 将来の親魚量（千トン）



## 将来の漁獲量（千トン）



**図11 再生産関係による加入のみを想定した場合の漁獲管理規則の下での親魚量と漁獲量の将来予測（現状の漁獲圧は参考）**

将来の加入量を再生産関係による加入のみ、F84%msyに乗じる調整係数である $\beta$ を1.0とした場合の漁獲管理規則に基づく将来予測結果を示す。親魚量の平均値は暫定目標管理基準値に漸近した後、同値をやや上回る水準で横ばいとなる。また、漁獲量の平均値は当初、高い値を示した後、84%MSYよりやや高い水準で維持される。

- 漁獲管理規則に基づく将来予測 ( $\beta=1.0$ の場合)
- 現状の漁獲圧に基づく将来予測

実線は予測結果の平均値を、網掛けは予測結果（1万回のシミュレーションを試行）の90%が含まれる範囲を示す。

- 84%MSY
- 暫定目標管理基準値
- 限界管理基準値
- ..... 禁漁水準

# マダイ（日本海西部・東シナ海系群）⑧

表4. 将来の平均親魚量（千トン）

2035年に親魚量がSB84%msy（13.1千トン）を上回る確率

$\beta$	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	
1.0	15	16	16	16	15	15	15	14	14	14	14	78%
0.9			16	17	17	17	17	17	17	17	17	100%
0.8			17	18	19	20	20	20	20	20	20	100%
0.7			18	19	21	23	24	24	25	25	25	100%
現状の漁獲圧			17	17	18	18	18	18	18	18	18	18

表5. 将来の平均漁獲量（トン）

$\beta$	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035
1.0	5,640	6,720	6,540	6,390	6,280	6,180	6,090	6,010	5,950	5,900	5,860
0.9		6,170	6,210	6,230	6,240	6,240	6,220	6,190	6,160	6,130	6,100
0.8		5,590	5,830	6,000	6,130	6,240	6,300	6,330	6,340	6,330	6,320
0.7		4,980	5,390	5,700	5,940	6,150	6,310	6,400	6,460	6,490	6,500
現状の漁獲圧		5,820	5,900	5,950	5,970	5,980	5,970	5,950	5,930	5,910	5,890

漁獲管理規則に基づく将来予測において、将来の加入量を再生産関係による加入のみとし、F84%msyに乗じる調整係数である $\beta$ を0.7～1.0の範囲で変更した場合と現状の漁獲圧で漁獲を行った場合の平均親魚量と平均漁獲量の推移を示す。2025年の漁獲量は予測される資源量と現状の漁獲圧（2022～2024年の平均： $\beta=0.87$ 相当）により仮定した。

$\beta=1.0$ の場合、2026年の平均漁獲量は6,720トン、2035年に親魚量が暫定目標管理基準値を上回る確率は78%と予測される。

※ 表の値は今後の資源評価により更新される。